

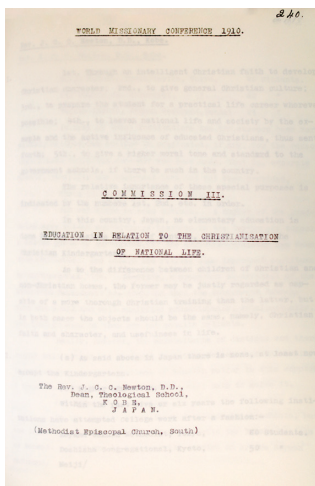
エディンバラにおける J. C. C. ニュートン宣教師

関西学院大学名誉教授・学院史編纂室顧問 神田 健次



エディンバラ世界宣教会議

ジュネーブに本部を置く世界教会協議会（WCC）の委員を長年務めていた関連で、10年ほど前にそのアーカイブズでの資料調査に訪れた時、J. C. C. ニュートン宣教師がエディンバラ世界宣教会議において提出した報告書（A4サイズで9頁）を発見し、大変驚いた。現代のエキュメニカル運動の嚆矢と呼べる画期的な世界会議にニュートン宣教師が積極的に参与し、貢献していたのである。1910年にエディンバラにおいて開催された世界宣教会議には1200名以上の代表が集い、宣教の多彩な諸問題を集中して協議し合った。エディンバラ宣教会議は、第一分科会 全世界への福音の使信、第二分科会 宣教地における教会、第三分科会 国民生活のキリスト教化に関連する教育、第四分科会 他宗教に対する宣教の使信、第五分科会 宣教師の養成、第六分科会 宣教の基礎としての教会、第七分科会 宣教と政府、第八分科会 協力と一致の促進、とい



ニュートン宣教師提出の報告書（WCC所蔵）

う八つの分科会で構成されていた。この中で「第二分科会 宣教地における教会」には、関西学院創立者のW. R. ランバス宣教師が南メソヂスト監督教会の監督として参与し、その副議長に任命されて重要な指導的役割を果たしている（拙稿「草創期のエキュメニカル運動とW. R. ランバス」『関西学院史紀要』18号、2012年を参照）。

政府の教育政策とキリスト教主義学校

ニュートン宣教師は、元来エキュメニカル運動へ強い関心をもっていた。エディンバラ宣教会議に参加した時は、ニュートン宣教師は関西学院の神学部長であった。ニュートン宣教師は、その報告書の中で日本におけるキリスト教教育の状況と課題について多岐に亘って論述しているが、ここでは二点に絞って述べたい。一つは、政府の教育政策とキリスト教主義学校の関係についてである。「政府は、宣教協会の目的を促進すると同時に阻止しようとする」と述べ、特に阻止する局面では、宗教教育に対して厳しい政

策を打ち出すことに言及している。この背景には、1899（明治32）年に「文部省訓令第12号」によって宗教教育を禁じる法令が発令され、キリスト教主義学校にとっては存立をおびやかす政府の圧迫に他ならなかった。キリスト教教育を続けることは、上級学校への進学や徴兵猶予の特典を失うことになり、男子校にとっては死活問題でもあった。この訓令は、国内外の批判によって実質的に効力を失ってゆく中、関西学院でも認定に向けて文部省との交渉が進められ、1909年に神学校と普通学部が文部大臣より認定された。その意味でこの問題は、ニュートン宣教師にとってキリスト教主義の精神を守り抜く厳しい闘いを意味していたと言える。

キリスト教総合大学の構想

もう一つは、「キリスト教総合大学（Christian University）の構想」である。ニュートン宣教師は、キリスト教主義教育の高等教育に言及しつつ、キリスト教総合大学を建設することは「この国における宣教政策の未解決な問題の一つ」と述べ、「エディンバラ会議は、それを解決する手助けをしてくれることを期待している」と要望している。このキリスト教大学構想に言及した背景には、エディンバラ宣教会議の前年、1909年10月に開催された開教50年記念会において採択されたキリスト教大学の設立に関する決議があったのであった。即ち、「実ニ日本ニ於ケル基督教ノ将来ハ現在ノ諸基督教学校ノ設備ヲ拡張スルト為ザルトニアリ。加之更ニ緊要ナルハ名実相適エル基督教大学ヲ速カニ設置スルニアリ」という決議文が可決されている。第三分科会の報告書（Report of Commission III. Education in Relation to the Christianisation of National Life, Edinburgh and London, 1910.）では、日本の場合、キリスト教主義学校が成功した現況について報告され、日本のキリスト教教育の全体な評価として、「キリスト教主義学校は、日本のキリスト教化において計り知れないほど重要な役割を果たしてきたし、これからもできるであろう」と、積極的な評価が強調されている。また、日本のような「教育が重視されている所では、大きな戦略的中心にキリスト教総合大学が据えられるべきだ」と叙述されている。ニュートン宣教師が要望したキリスト教総合大学構想について、公式報告書に色濃く反映されているのである。

（かんだ けんじ）